

土左日記に見る淀川水運

徳 原 茂 実

はじめに

『土左日記』について、私はこれまでにいくつかの論考を発表している。^(注1) それらにおける私の基本的な考え方は次の通りである。

- ①『土左日記』は、女性主人公の日記というスタイルで書かれた創作である。したがって、作者紀貫之が女性のふりをして書いた日記であるとする、いわゆる「女性仮託説」は採らない。
- ②『土左日記』はフィクションであるが、某年十二月二十一日の門出から翌年二月十六日の帰京に至る作中の旅程は、作者貫之の実体験に基づいて書かれていると考えられる。すなわちこの作品によって、実際の貫之一行の旅程が、承平四年（九三四）十二月二十一日の門出に始まり、承平五年（九三五）二月十六日の帰京に終わる五十五日間の旅であったことが判明する。
- ③作中の地名等も、おおむね実際の通りである。地名等に関する、作者貫之による誤記や意図的な改変はない。

本稿においては、『土左日記』二月五日条の住吉沖通過から十一日条の山崎到着、さらに十五日条の下船に至る、難波津入港と淀川遡航をめぐる記述を取り上げ、そこから貫之一行が経験した当時の淀川水運の実態を読み取ってみたい。なお、これ

までの拙稿と同様、この日記を書いたとされている女性については、括弧つきで「作者」と表記し、真の作者紀貫之と区別する。『土左日記』の本文は、萩谷朴編『影印本 土左日記（新訂版）』（新典社）に影印された青谿書屋本によって掲げ、続く論考の中で引用する場合は、適宜、仮名表記を漢字表記に改めて読みやすくした。

—

二月五日条は、一行の船が住吉の沖合を通過した際の出来事が語られた後、「作者」の住吉明神に対する失望感が表明されて終わっている。その夜、停泊した場所については、翌六日条の冒頭、「六日、みをつくしのもとよりいでて、なにはにつきて、かはじりにいる」から推定が可能である。

「みをつくし」は、「航路標識の杭」（新潮集成頭注、新編全集頭注）などと説明されるのが常であり、それに間違いはないが、この一文における「みをつくし」については、普通名詞ではなく固有名詞であることを読み取らなければならない。航路標識である濡標は、浅瀬の多い難波津を船が安全に航行できるように、港内の随所に設置されていたであろうが、「濡標のもとより出でて」という記述は、それが特定の濡標であることを意味している。おそらく難波津の入り口付近に、この先は浅瀬が多くて危険であることを表示する巨大な濡標が設置され、その濡標の近くには、これから難波津に入港しようとする船のための船溜まりも設けられていたのであろう。二月五日条の冒頭部に「いづみのなだよりをづのとまりをおふ」とある「小津の泊」は、この船溜まりをさす名称であるのかもしれない。その船溜まりで一泊した貫之たち一行の船は、巨大な濡標を仰ぎつつ、難波津へと進入したのである。ちなみに、『土左日記』において名詞「もと」は、この「濡標のもと」以外に三例が見出されるが、「（松の）もとごとくに波うちよせ」（一月九日条）、「その岩のもとに、波白くうちよす」（二月二十一日条）、「黒鳥のもとに、白き波をよす」（同日条）と、いずれも目に立つ物の下部を意味している。「濡標のもと」についても同様に理解できよう。

二月五日夜の停泊場所について村瀬敏夫は『土佐日記』^(注3)「旅程考」において、住吉津と推定している。しかし、住吉津は現在の住吉大社の南方を西流する細江川（細井川）の河口とされており、『大阪府史』第二卷、二月五日に住吉大社の沖合を北へと通過した船が、その夜、住吉大社の南方に位置する港に停泊したとは考えられない。この日は難波津の入口付近にまで到達したのであるが、すでに夕刻であったため、慎重な操船が必要な難波津への進入は翌日のこととして、難波津の入り口に屹立する大濤標の近くの船溜まりに一泊したのであろう。

さて、二月六日に大濤標を仰ぎ見ながら出航した船は、「難波に着きて、河尻に入る」とあるように、「難波」に到着し、さらに「河尻」に進入している。難波津は淀川河口の周辺に広がり、多くの島々や幾筋もの水路、芦に覆われた湿地帯などからなる広大な水域であったようだ。一行の船はいくつもの濤標（航路標識）に従って慎重に航行し、「難波」と称される難波津の奥まった地点に到着し、さらに「河尻」（淀川河口）へと向かったのである。本文にいう「難波」は、「難波に着きて」という表現からして、ある特定の地域を指す地名であり、難波津全体を意味するのではなからう。萩谷『全注釈』にも「今の大阪市あたりを総称する古名であるが、ここではもっと局限された地名」云々とある。おそらく「難波」には、難波津を管轄する役人たちや、船員船客を相手にする商人たちなどが、集落を形成していたのであろう。

この日、難波津に進入してから淀川河口まで一日を要している。それだけ慎重な操船が必要とされたに違いない。「いつしかといふせかりつる難波潟芦こぎそけてみ船きにけり」という「淡路の島のおほいご」の歌には、随所に芦の茂る水路を航行するさまがリアルに歌い上げられているといえよう。なお、『古今集』雑歌上に、貫之が難波に下向した折の歌が見られるから（九一六、九一八）、貫之には難波津あたりの土地勘があったものと推測される。

次に、二月七日条の「けふ、かはじりにふねいりたちて、こぎのぼるに、かはのみづびて、なやみわづらふ」について検討を加えてみたい。六日条に「河尻に入る」とあり、七日条に「河尻に船入りたちて」とあるのは、六日には淀川河口付近の船溜まりに停泊して一夜を明かし、七日に本格的な淀川遡航を開始したことを意味しているのであろう。「川の水干て、悩みわづらふ」と、一行がこの日から川の水深の浅さに苦しむことになるのはそのためで、前日航行した難波津は、海面の高さは大阪湾と同じであるから、干潮時を避けて航行すれば、「水干て」という憂いはなかったのである。なお、当時の淀川河口（河尻）の位置は、諸氏が推測するように、おおむね現在の天満、あるいは堂島あたりでもあったろうが、洪水に見舞われれば一夜にして地形が変化することもあるから、承平五年二月の時点でそれがどこであったか、具体的な推定は不可能である。ところで、村瀬敏夫は前掲論文において、「河尻」について次のように論じている。

「ここで注目すべきは、平成二年三月に刊行された『大阪府史』第二卷（第三章の第一節、松原弘宣氏執筆）の記述である。ここでは「なにはにつきて、かはじりにいる」について、「淀川の河口を河尻といった例がなく、ここの記事は難波から転じて三国川の河尻に至り、三国川をさかのぼったと解したい」とある。この「淀川の河口を河尻といった例がなく」という指摘は重要である。（中略）淀川から三国川に通じる水路が開かれたのは、瀬戸内海の海上交通路の開発の意味があったのだが、それだけに水路として恵まれた条件にあったろう。それに対して、淀川は大河であるために氾濫したり、また河原が広すぎて水が浅くなるなどの弊害があった。貫之一行は二月七日以降、川の水が干て遡航に苦労するのであるが、これが淀川だったら、もっと苦労していたかもしれない。おそらく楫取は難波到着後、淀川の水路の状況を尋ねて、人工が加わって遡航のしやすい三国川を選んだのだろう。」

村瀬はこのように述べている。村瀬はその著『現代語訳対照 土佐日記』（昭和五十六年十月 旺文社）、『紀貫之伝の研究』（昭和五十六年十一月 桜楓社）、『宮廷歌人 紀貫之』（昭和六十二年三月 新典社）などにおいては、通説通り淀川河口からの遡航と述べているが、平成六年発表のこの論考においては、右引用文中に引かれている平成二年刊の『大阪府史』の記述によって、三国川の河尻からの遡航と考えを改めているのである。

しかし、「淀川の河口を河尻といった例がなく」という松原説には容易に従い難い。「河尻」なる語の用例の蒐集が完璧であり、その用例全てについて淀川の河口ではないことが確かめられて初めて、「現存史料による限り、淀川の河口を河尻といった例はない」と言うことが可能になろうが、それだけの手続きが踏まれているのであろうか。そもそも「河尻」なる語は本来普通名詞であり、全国の多くの河川の河口が「河尻」と呼ばれていたであらうが、交通の要衝として特に著名な「河尻」が固有名詞化したのであろう。三国川（神崎川）の「河尻」が固有名詞化したのは、それが瀬戸内水運の要衝だったからにちがいない。^{（注）}淀川の河口が、固有名詞としても、ましてや普通名詞としてすら「河尻」と呼称されなかったとは考えがたいのではないだろうか。

貫之一行の船が住吉神社の沖を通過し、大濠標の脇を通過して難波津に進入し、慎重に操船して「難波」に達し、淀川の河口に近付いていることは、本文によって明らかである。ところが、「難波」から反転して再び難波津を通過して大阪湾に出、北西方向へ航路を取り、三国川（神崎川）の河口（現在の尼崎市今福あたり）から遡航したというのが松原や村瀬の説であるが、非現実的な推定と言わざるをえないのではなからうか。「おそらく楫取は難波到着後、淀川の水路の状況を尋ね」たとのことであるが、そのような重要な情報は、難波津に進入する前にキャッチしておくのが楫取の役目であらう。また仮に、座礁の危険をもちえりみず、難波津の海域を往復するという無駄足を踏んだのであれば、楫取に対して常に批判的な女性「作者」が、それに関して何も書かずにすませるはずはなからうと思う。

淀川の遡航を始めた二月七日の夜の停泊場所については記述がないが、翌八日に「なほかはのぼりになづみて、とりかひのみまきといふほとりとまるとあるから、七日夜は淀川の河尻から鳥養までの間の某所に停泊したと知られる。萩谷『全注釈』は江口（現大阪市東淀川区）のあたりかと推測している。もしそうであるならば、船中の男たちは江口の遊女に無関心であつたはずはなく、そのような男たちに対して批判的な「作者」は、江口なる地名や遊女が存在をあえて筆にしなかった（こゝになつてゐる）とも考えられる。それは貫之による「作者」の人物造形の一端とも見なせようが、後世、若き日の『更級日記』作者が、足柄山の遊女にいたく心を奪われていることからすると、貫之の配慮はやや過剰であつたかもしれない。

なお、『続日本紀』延暦四年（七八五）正月十四日条によつて、摂津国の神下、梓江、鰐生野で淀川と三国川（現在の安威川）とをつなぐ運河の掘削工事が行われたことが知られる。これによつて淀川水系と三国川（安威川・神崎川）水系とが結ばれ、瀬戸内海方面に往来する船舶の多くは三国川を利用することとなつた。^{（注5）}三国川の川尻が固有名詞化したゆえんである。この運河は現在の大阪府摂津市一津屋あたりで淀川から分岐していたと考えられており、それは江口から至近の位置にある。^{（注6）}江口が歓楽の地として栄えたのは、水上交通の要衝という地の利によるものであらう。

八日に停泊した「鳥養の御牧」は、『延喜式』巻第四十八左馬寮に「摂津国鳥養牧」とある公牧で、現在も摂津市には鳥飼上、鳥飼中、鳥飼下など「鳥飼」を冠する町名が多く存在する。江口からは四キロメートル前後の距離である。七日に「けふ、河尻に船いらちて、こぎ上るに、河の水ひて、なやみわずらふ。船の上ることいとかたし」とあつて以来、八日、九日も水深不足のために難渋しているのであるが、九日条に「船を曳きつつのぼれども」とあるように、船は綱手によつて牽引されていた。『類聚三代格』巻十九、禁制事に収める太政官符「応禁制河内摂津両国諸牧々子等妨往還船事」（昌泰元年十一月十一日）は、淀川の河畔で綱手を引いて船を牽引していた事実にかかわる内容である。^{（注7）}

四

二月九日条は「こころもとなきに、あけぬから、ふねをひきつつのぼれども、かはのみづなければ、あざりにのみぞあざる。このあひだに、わだのとまりのあかれのところといふところあり。よね、いなどをこへば、おこなひつ。かくてふねひきのぼるに、なぎさのふんといふところをみつゆく」と始まる。この「わだの泊のあかれの所といふ所」の所在については、本文による限り、八日夜に停泊した「鳥養の御牧」と、このあと通過する「渚の院といふ所」との間ということになるから、それは今日の高槻市と枚方市に挟まれた淀川流域のどこかであろう。ところが、そのあたりに有力な候補地を見出すことが困難であると考えられたところから、従来さまざまな議論がある。

現在、主流となっている考え方は、淀川と三国川（現在の安威川。神崎川の上流）をつなぐ運河の分岐点を、「わだの泊のあかれの所」に比定する説である。それは現在の摂津市一津屋あたりで、鳥養より下流（二月七日、八日ごろ通過）である。これは天坊幸彦が著書『上代浪華の歴史地理的研究』（昭和二十二年 大八洲出版）において提唱した説で、萩谷朴がこれを『土佐日記全注釈』に紹介して賛意を表して以来、有力な所説として、近年の主要な校注本（新潮古典集成、岩波新大系、小学館新編全集、おうふう『新編土佐日記』等）にも継承されている。萩谷が「天坊教授の所説を大約」したという文章を『全注釈』から引用しよう。

イ、淀川が神崎川に分かれる所、これが『土佐日記』の「あかれの所」である。特に「ところ」と呼称したのは、この分流が人為的努力になる疎水であるからである。附近には「別府」という地名も現存している。

ロ、『土佐日記』に「鳥飼の御牧」の記述のあとに、「和田の泊」の地名が出てくるから、これまでの論者は、和田の泊を鳥飼と渚の院との間に求めたが、『土佐日記』に五箇所出て来る「この間に」という記述は、いずれも時間的用法で空間的用法で

はないから、鳥飼より上流に限定する必要はない。

ハ、現在、神崎川の落口をはさんで、江口の対岸に和道（わんど）という字名が残っているが、それこそ和田の転訛であろう。以上である。イに「淀川が神崎川に分かれる所」とあるのは、先に取り上げた『続日本紀』延暦四年（七八五）正月十四日条に見える、淀川と三国川（現安威川）を結ぶ運河（疎水）への分岐点を意味しているのであろう。ここで運河を「神崎川」と呼称しているのは誤りであり、明治期に掘削された神崎川（注5参照）との混同をすら招きかねない。なお、ハに見える「わんど」は、近年の淀川流域においては、本流とはつながっていないながらも池のような地形をなす部分をさす普通名詞である。江口の対岸にあったという和道（わんど）という字名も、さほど古いものではないのではなからうか。

天坊説の最大の難点は右の口である。確かに『土左日記』には「この間に」という記述が五か所あるのだが、二月九日条以外の四例について見ると、いずれも明らかに、その日のうちに起こった出来事について述べるための前置きとなっている。一月七日条では、池という所に住む女性から沢山のご馳走が贈られてきたことが記されたあとに、「かくて、この間にこと多かり。今日、破籠持たせて来た人、その名などぞや、今思ひいでむ」とあって、このあと、その人物の登場となる。その日のうちの出来事であることは明らかである。一月十七日条では冒頭に「曇れる雲なくなりて、暁月夜いとおもしろければ、船をいだしてこぎゆく。この間に、雲の上も海の底も、同じごとくになむありける」とあって、「この間に」が、この時に見た光景を述べるにあたつての前置きとなっているのは明らかである。一月二十六日条では、「手向けする所」に幣を奉ったあとに、「この間に、風のよければ」とあって、「この間に」の前後の記述は、同日の出来事であるのみならず、時間的に連続しているのである。二月一日条では、「黒崎の松原」についての記述のあとに「この間に、今日は箱の浦といふ所より、綱手引きてゆく」とあって、「黒崎の松原」の沖を船が通過して「箱の浦」へと至る航程が、「この間に」をはさんで記述されているのである。このように、以上の四例は全て、「この間に」の前後の記述が同日の出来事や状況を述べているみならず、一月十七日条

や同二十六日条においては、「この間に」をはさんで時間が経過していることが明白であると言えよう。

二月九日条には「心もとなきに、明けぬから、船を曳きつつのぼれども、川の水なければ、ゐざりにのみぞゐざる。この間に、わだの泊のあかれの所といふ所あり。米、魚など乞へば、おこなひつ。かくて船曳きのぼるに、渚の院といふ所を見つて行く」とある。「この間に」に続く記述が同日の所見や出来事であるのはもとより、前夜の停泊地（鳥養の御牧）を出発して「わだの泊のあかれの所といふ所」を通過し、「渚の院といふ所」に至るという航程が、地理的、時間的な順序通りに記述されていることは、先に見た四例に徴しても明らかであろう。仮に「わだの泊のあかれの所」が鳥養より下流、江口の対岸であるならば、実際にその地点を通過したのは二月七日、あるいは八日であるから、その記述が二月九日条に挿入されるいわれはないのである。そもそも『土左日記』は、日付のあとにその日の出来事や所見が記述されていることに疑いはなく、「わだの泊のあかれの所」に限って例外とする理由はない。

『全注釈』を始め諸注の多くは、「わだの泊のあかれの所」の所在地については天坊説を継承しつつ、それが二月九日条に記述されているのは虚構であるとみなしている。しかし、「わだの泊のあかれの所」と称される地点の存在を、『土左日記』を唯一の根拠として認定しておきながら、その所在地についての『土左日記』の記述を虚構とみなすのは筋が通らない。本稿の冒頭にも述べた通り、私は『土左日記』作中の地名については、おおむね実際の通りであったと考えるものである。^(注8)「わだの泊のあかれの所」は純粹の地名とはいえないが、地名に準ずるそのような呼称が、確かに存在したと考えている。それはおそらく、「和田の泊」（現神戸市）への分岐点を意味しているのだろう。^(注9)「あかれ」は「わかれ」の意であり、「わだの泊へのあかれの所」という文言が地名化して「わだの泊のあかれの所」と縮約されたと考えられる。そして、二月九日条に記述されている通り、それは淀川を鳥養から上流にさかのぼり、渚の院にさしかかるまでの間の右岸に存在したはずである。現在の高槻市三島江あたりであろうか。^(注10)

「わだの泊のあかれの所」から三国川（現安威川）方面に向かう運河、あるいは街道が分岐しており、そこを通過して三国

川に至り、難波津を経ることなく神崎川河口（現尼崎市）へ達するならば、それは和田の泊（大和田の泊とも。現神戸市）への近道である。同様の目的のもと、早くに鳥養の下流から三国川への運河が通じていたが（前掲『続日本紀』延暦四年正月十四日条）、瀬戸内海方面の水運の発展にともなう船舶の往来や物資の流通が増加したために、鳥養の上流にも淀川と三国川を結ぶ運河、あるいは街道が設けられたと推測しておきたい。現在その痕跡は残されていないようだが、鳥養下流の江口対岸から分岐していた運河の痕跡もほぼ消滅している。将来、考古学的な裏付けがなされることに期待したい。

以上のように考えるならば、「わだの泊のあかれの所」における「米、魚など乞へば、おこなひつ」といういきさつについても、新たな解釈が可能となろう。これについて『全注釈』は、「この「こふ」者は、曲の泊まりに群がって、立ち寄る船の船客に物乞いをする修行者・乞食の類であり、貫之たちが、その乞食に対して、布施の行を「おこなった」ものであるという考えが、すべての条件を満足させる唯一の解釈として成立するのである」と述べている。これは「わだの泊のあかれの所」を「繁華な歓楽街江口の対岸であるところの和道や一津屋」に比定し、そこは「修行者・乞食の類が蟬集して、通行の旅客に物乞いをするのに格好の土地である」とする推定に基づく解釈である。なお、新大系が「修行僧や乞食が欲しがるので施しをする」と注し、新編全集が「米や魚を乞うので、施しをした」と現代語訳し、『新編土左日記』が「（乞食・修行僧が集まる場所なので）施しをした」と注しているのは、いずれも『全注釈』説の継承である。しかし「わだの泊のあかれの所」を、近くに江口のような繁華の地をもたない鳥養上流からの分岐点とする本稿の立場に立つならば、誰が米や魚を乞うたと考えればいいのか。

淀川から三国川へ向かう分岐点においては、淀川方面や三国川方面への下り船、淀川方面や三国川方面からの上り船が錯綜するであろうから、それらの安全運航のための業務等に従事する人たちが「和田の泊のあかれの所」に駐在し、往来する船舶に心付けを要求していたのではないか。たとえそのような要求に応じるいわれはなくても、便宜を図ってもらうために、人々にはなにがしかの金品を彼らに与えていたのではないか。「乞へば」「おこないつ」という、施しを求められてそれを与えたといった意味合いの記述は、法規的には応じるいわれのない要求に従ったことを意味しているのであろう。これはもちろん想像にす

ぎないが、修行者や乞食への施しとする想像よりは蓋然性が高いと思うのである。

五

「わだの泊のあかれの所」の所在については、近年、二つの新説が提唱されているので、検討を加えておきたい、久保田孝夫は『土佐日記』に見る「淀川」^(注1)において、それを高槻市津之江に比定し、次のように述べている。

「芥川の河口は「唐崎」の地名も残っており、そこから隣接して芥川沿いの上流が筑紫津神社のある「津之江」である。また、この地には都からの西国街道が芥川を横切っている。そしてそれが交差するすぐ西に島上郡の郡衙跡が発掘されている。まさにこの地は交通の要衝というにふさわしい。これらのことから、「三島」「唐崎」「津之江」にあった「筑紫津」をこの土佐日記の「わだの泊のあかれの所」と順路的にも想定することができる。「わかれの所」は芥川を少しさかのぼった西国街道への「わかれ」であり、鳥飼と渚の院の間に位置しているのである。」

久保田が『土佐日記』の記述に従い、「わだの泊のあかれの所」を鳥養と渚の院の間に比定しようとしているのは評価できる。しかしながら、貫之一行が、ただでさえ水深の浅い淀川本流から支流の芥川へと進入し、遡って「わだの泊のあかれの所」に達し、再び淀川本流に戻るといふ航行をあえてなした理由についての説明がつかない限り、高槻市津之江説は認め難いと思うのである。

内田美由紀は『土佐日記』「わだのとまりのあかれのところ」^(注12)において、大阪近辺に残る地名「わだ」について一々検討を加え、結論として「わだの泊」を門真市大和田（京阪電鉄大和田駅付近）に比定し、その地が交通の要衝であって各地への分岐点であったところから「あかれの所」と称されたのではないかと推定している。しかし、この地は鳥養と渚の院との間という『土佐日記』の記述に適合していないし、その点についての説明もなされておらず、納得し難い。そもそも、当時の淀川が門真市

大和田付近を流れていたという大胆な説が、古代史学や考古学、歴史地理学などの専門家によっても唱えられているのであれば紹介がなされるべきだが、論考を読む限り、これは内田独自の推測であるらしく、説得力を欠いていると言わざるをえない。「わだの泊」を淀川流域に残る地名から解明しようとする研究は早くから見られ、久保田や内田もその流れを汲むものと言えようが、『土左日記』本文にはA「わだの泊のあかれの所あり」ではなく、B「わだの泊のあかれの所といふ所あり」とあることに注意しなければならないのではないか。Aであれば、「わだの泊」なる船着き場が淀川流域に存在し、そこからいずれかへ通じる運河か街道の分岐点を意味すると考えていいであろうが、Bであれば、「わだの泊のあかれの所」という地名（に準ずる地点）が存在することとなり、「わだの泊」はその構成分子となって背景化するから、必ずしも「わだの泊」を淀川流域に求める必要はない。このように、「所」の名称の点からも、遠方の「和田の泊」（現神戸市）への分岐点と考えてもさしつかえはないと考えるものである。

六

二月九日、「わだの泊のあかれの所といふ所」を通過した一行は、渚の院（現枚方市渚）を見つつ遡航し、その夜は鵜殿（現高槻市鵜殿）に停泊した。翌十日は同所に滞在、十一日には出航し、東に男山を望んで石清水八幡宮を遙拝し、山崎の橋に達した。ついで相応寺（山崎橋の西詰に所在）のほとりに船をとどめて、「とかくさだむることあり」とされている。

この際、まっ先に「定むる」必要があるのは、入京の日時であろう。私は「土左日記略注（^{（注14）}）」において、一行が十二月二十一日の戌の時に門出し、二十七日に大津を出航したのは、いずれも陰陽師の勘申に従ったものと推測したが、当時の風習から推して、それに間違いはなからうと思う。入京に際しても、その日時について陰陽師に諮問するのは当然であったに違いない。二月十六日夜の入京が至当との陰陽師の勘申を受けて、その日までに船荷を荷車や小舟に積み替えて、京の前国司邸に

送付する段取りなどが話し合われたのであろう。^(註15) こうして、淀川を遡航する船旅は終りを迎えたのであった。

注

(1) 『土左日記』にかかわる拙稿のうち、論文は次の三編である。

① 「土左日記」「船のをさしける翁」について―前国守（船君）像の確定へ―（『武庫川国文』第七十八号 平成二十六年十一月）

② 「土左日記を読みなおす」（『日本語日本文学論叢』第十号 平成二十七年三月）

③ 「土左日記の冒頭文について―小松英雄説批判―」（『日本語日本文学論叢』第十一号 平成二十八年二月）

これらのほかに「土左日記略注（一）」（『武庫川国文』第七十九号 平成二十七年十一月）、「土左日記略注（二）」（『武庫川国文』第八十号 平成二十八年三月）、「土左日記略注（三）」（『武庫川国文』第八十一号 平成二十八年十一月）がある。

(2) 『延喜式』卷五十、雜式に「凡そ難波津頭の海中には濤標を立てよ（原漢文）とある。「その頭というのは入り口をさす」虎尾俊哉『延喜式』

二二二ページ）とのことであれば、この『延喜式』の記述は、『土左日記』二月六日条の「濤標」についての私の推測を裏付ける。なお、

「濤標」とは「水深の度盛りをした満干測定標」を意味し、航路標識たる「みをつくし」にこの字をあてるのは誤りとの見解があるが（滝川政次郎「みをつくし考」『上方文化』第五号、昭和三十七年六月）、本稿では便宜的に通用の「濤標」を用いておいた。

(3) 村瀬敏夫「『土佐日記』旅程考」（『平林文雄教授退官記念論集 平安日記文学の研究』所収 平成六年十月 和泉書院）

(4) 『源氏物語』玉鬘巻の、玉鬘一行の船が瀬戸内海を東上するくだりに、「川尻といふ所、近づきぬ」「韓泊より、川尻おすほどは」とある「川尻」は、諸注が指摘するように、神崎川（三国川）の河口をさす固有名詞であろう。

(5) 現在、摂津市一津屋で淀川から分流し、大阪市東淀川区相川で安威川に合流する神崎川は、明治十一年に新たに掘削された水路であり、古代の運河とは流路が異なる。

(6) 鈴木靖民他編『日本古代の運河と水上交通』（八木書店 平成二十七年五月）など参照。

(7) この太政官符については、注（6）書19ページ以下参照。

(8) 「おおむね実際の通り」とことわったのは、一月三十日、二月一日、同五日条に見える「和泉のなだ」について、作者貫之による誤記とする見解が存在するからであるが、私はこれを女性「作者」の造形にかかわる問題ととらえ、別稿を予定している。

(9) これと同様の考え方としては、早く田中大秀の『土佐日記解』に、一案として「和田泊の別の所とつづきて、和田の泊の方へ分かれゆく枝道の有る所か。さらば、あかれの所は、和田と云ふ地内に有るにはあらぬ意なり」とある。村瀬敏夫も前掲論文（注4参照）において、「和田の泊への分岐点」とする解釈を採っている。ただし村瀬はその分岐点を鳥養の下流、江口の対岸としている。

(10) 吉田東伍『増補大日本地名辞書』第二卷「摂津（大阪）三島郡」の「和田泊」の項に「土佐日記に「和田の泊のあかれの所」と録せる地は、水路鳥飼と渚院の間なれば三島江若しくは枚方駅に当る如し、今其名を失ふ」とあるのは正しい判断であったと言えよう。

(11) 大阪成蹊女子短期大学国文学科研究室編『淀川の文化と文学』（平成十三年十二月 和泉書院）所収。

(12) 内田美由紀『伊勢物語考―成立と歴史的背景』（平成二十六年一月 新典社）所収。

(13) たとえば山田孝雄は『土佐日記』（昭和十八年 宝文館）において、河内国交野郡禁野村和田寺（現枚方市禁野）に比定している。前記天坊幸彦の「わんど」説も、淀川流域に残る地名から「和田の泊」の所在を説明しようとする一説にほかならない。

(14) 『武庫川国文』第七十九号（平成二十七年十一月）所収。

(15) 久保田孝夫は『土佐日記』の「山崎」（『中古文学』第八十七号 平成二十三年五月）において、二月十一日から十六日までの山崎滞在は、貫之が当時山城守であった源公忠と共に、山崎の国司館で、醍醐天皇、宇多法皇、藤原定方、藤原兼輔の死を嘆き悲しむ時間であったと論じているが、一族郎党と貴重な積荷を船に放置したままで、貫之一人が国司館へ出向いてそのような数日間を過ごしていたとの推測は現実的ではない。

（とくはら・しげみ 本学教授）